



研究調査報告

ホリのある暮らし —柳川（福岡県）の調査より—

安室 知
(非文字資料研究センター 研究員)

1. 有明海と柳川

有明海は長崎県・佐賀県・福岡県・熊本県に面する日本でも有数の内湾である。干満差が大きなことで知られ、最大では5メートルを超すとされる。また、有明海は全体に水深が浅く、平均では20メートルほどしかない。そこに、九州最大の川である筑後川をはじめ、鹿島川、嘉瀬川、矢部川、菊池川、白川、緑川など多くの河川が流入している。そして、そうした多くの河川がもたらす泥土が有明海全体を巨大な干潟にしている。そのため、古来から沿岸は埋め立てられて新田が造られてきた。

一方、内陸に目を向けると、海岸線に近い沖積地では、ホリと呼ぶクリークが多く残されている。こうしたホリは末が海と繋がっているため、干満の影響を受けることになり、その多くは汽水となっている。

柳河藩の城下町であり水郷で知られる柳川（福岡県）

の場合、街中を縦横に走るホリ（堀）は、住民にとっては街のシンボルとして、また柳川を訪れる観光客にとっては川下りの場として利用されている。しかし、ホリは、町場だけでなく、農村部においても重要な意味を持っていた。そうした様子を、以下では、柳川市の蒲池地区を中心にしてみる。

2. ホリからもたらされるもの

蒲池の場合、ホリの水は水田用水としてとくに重要であった。しかし、ホリはそれだけでなく、蒲池で暮らす上でさまざまな面で住民生活に関わりを持っていた。図1にあるように、水田地帯を縦横に走るホリには、慣行的に所有者が存在し、それはホリヌシ（堀主）といわれた。多くの場合、ホリは接する田に付属するとされた。ホリからは用水の他にも住民生活上とくに重要な二つのものがもたらされる。魚とゴミである。



図1 柳川市蒲池（国土地理院地形図より作製）

※黒い所がホリ

これらを採取する権利はホリヌシに限られていた。

水田に水が必要なくなる農閑期になると、ホリヌシを中心に仲間と誘い合ってはホリホシ（堀干）がおこなわれる。その場合、ホリホシの手伝いをするのをテマガタ（手間ガタ）といい、仲間同士お互いにテマガタをしあった。

ホリヌシは縦横一間、深さ3尺ほどの穴を掘ったりして、ホリの中にカマと呼ぶ魚の寄り場をあらかじめ作っておいた。ホリは単に漁場として利用されるだけでなく天然の養魚場でもあったわけである。

ホリにはコイ・フナ・ナマズ・ウナギなどの魚がいるが、とくに冬に捕った魚は串刺しにしてワラツボ（藁束）に刺し、クド（竈）の煙でいぶして保存することができた。どの家にも1・2本のワラツボが必ずあったという。この他、魚を捕るためにホリにはクモデ（四

ツ手網）やローゲ（簀）が仕掛けられていたし、入り江になっているところではハンギリ（桶）に乗ってヒシノミ（菱の実）を採ることもできた。

ゴミとは、現在でいう廃棄物の意味ではなく、ホリ底に泥状になって溜まった水草などの腐植沈殿物をさしている。これは柳川においては化学肥料が安価に手に入る以前、田畑の重要な肥料とされた。

ホリ底に溜まったゴミを揚げることをゴミアゲまたはドロアゲといった。秋から春先にかけてよくおこなわれたが、とくに田仕事本格化する前の3・4月にさかんにおこなわれた。ゴミアゲは10軒ほどが共同で、ゴミアゲ仲間などと呼ぶ組織を作っておこなった。ゴミアゲは、まず足踏み水車で水を掻き出してから、二人一組になって桶を操作しゴミを陸上に跳ね上げた。その後には、ベルトコンベア式のゴミアゲ機械も



写真1 ホリ



写真2 ホリの水を掻き出す足踏み水車



写真3 ホリの水を掻き出す桶



用いられるようになった。そうして汲み上げたゴミを田の一角に広げて天日で干してから田畑に入れる。

3. ホリの利用にみる農と漁の相関

つまり、同じホリ底の泥を除去する作業でも、肥料を得るためや用水路の保守のためにおこなう場合にはゴミアゲといい、ホリの魚を捕ることを主目的にするときはホリホシと呼んでいたことになる。結局のところ、ホリホシと言おうがまたゴミアゲと言おうが、実際には魚もゴミも採取している場合が多い。とくにゴミアゲの場合には必ずといってよいくらいに魚捕りが伴っている。その意味でいえば、ホリ底の泥を除去する作業は、魚が主産物で泥が副産物なのか、またその反対なのかといったことではなく、どちらの意味もあるととったほうがよい。

生活世界では、一つの生業技術が単一の意味しか持たないことはむしろ希であり、多義的であることのほ

うが一般的である。農と漁というまったく正反対の生業技術のようにみえても、実のところ生活を維持するという側面からすると、一つの技術がその両方に意味を持つ場面がよくある。とくに水（用水）を介して結びつく農と漁との関係においては、そうした傾向が高い。

ホリホシやゴミアゲは柳川の農村部においては、昭和20年代までおこなわれていた。その後は、農業に化学肥料が普及したことや、食物として淡水魚への嗜好が減少したことなどから、ホリホシやゴミアゲといったことはほとんどおこなわれなくなった。それにより、ホリは住民の生活世界から切り離された存在になってしまった。その結果、ホリへの関心は薄れ、ホリは何ら使われることないまま放置されることになる。現在、ホリには汚水やゴミ（廃棄物の意味）が溜まり、ホリは住民生活にとってはすっかり厄介者になってしまったといえよう。

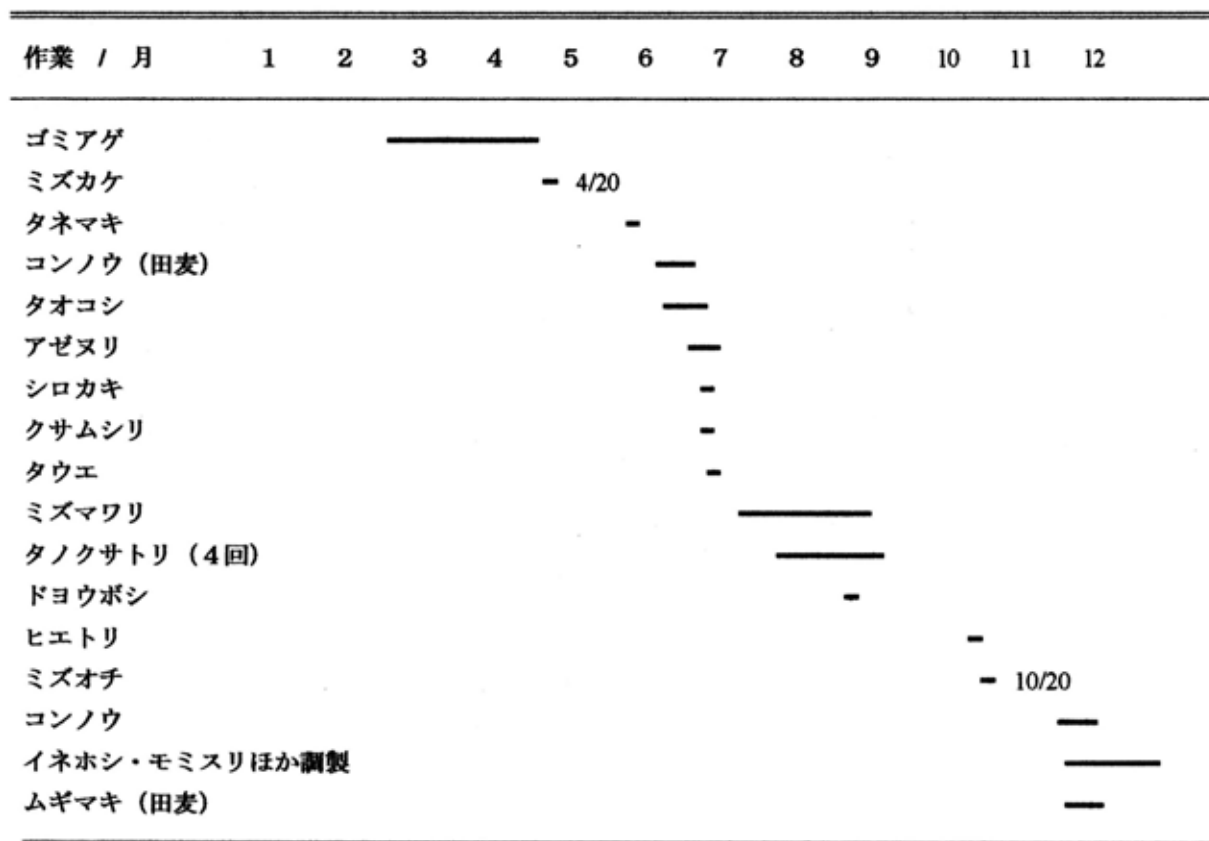


図2 柳川市蒲池の農耕暦



写真4 ホリに仕掛けられたクモデ



写真6 ホリの魚を突くヤス



写真7 ホリの水を汲む場所



写真5 柳川のカッパ



写真8 川下りの観光船